

## デカルトにおける観念の真理と判断の真理

「真で不変なる本性」をめぐって

有賀雄大(東京大学)

真理と虚偽は、例えば主語と述語からなる文のような、二項が結合される構造において成立する。これは古代から現在まで広く共有されてきた真理についての考え方である。一方、こうした結合を前提せず、あるものがそれ自身で真でありうるということ、これもまた哲学史上しばしば現れた主張である。こうした二種の真理は、デカルトにおいても見出される。デカルトは一方で、観念が真であることを主張する。例えば、神の観念は、神が実在するかしないかを問題する以前に「それ自体で *per se*」「最高に真である」とされる。他方、デカルトは「私は存在する」、「三角形の内角和は二直角である」といった命題形式で表現される真理に多く言及しており、さらに本来の意味での虚偽は「判断 *judicium*」においてのみ生ずると述べてもいる(「第三省察」)。だとすれば、観念と判断、それぞれについて言われる真理の関係が問題となる。この関係を解きほぐし、一貫した思考の筋を取り出すことを通して、デカルト真理論の一側面を明らかにすること、これを本発表は目的とする。

二種の真理の一貫した理解を得るために、今回主に扱うテキストは『省察』第五省察、とくに AT 版 pp. 63-65 の、「真で不変なる本性 *vera et immutabilis natura*」をめぐる議論の箇所である。なるほどたしかに、観念の真理と判断の真理について包括的な説明を与えるためには、「観念」や「判断」それ自体についての議論、観念の「質料的虚偽」の問題、コギト命題の真理などを考慮に入れる必要がある。しかしながら本発表の枠内では、二つの真理の関係を明らかにするために最も重要な箇所のみ話題を絞ることを選択したい。その意味で「第五省察」の上記箇所は、「第四省察」において集中的に論じられた「判断」の真理と、観念が表す「本性」の真理との関係が詳細に展開されている箇所だと考えられる。

このテキストの分析から我々は以下の三点を見出すことができる。1/観念の表す事物(例えば三角形)の本性が「真」であり、無でない何ものであるということは、その事物の有する諸特性(例えば内角和が二直角であること)を我々が論証することができる、という事実を引き合いに出すことで結論づけられている。この一見飛躍した証明が成立すると考えるためには、デカルトがここで、本性が「真である」ということの内実を新たに規定する議論を行っていると読むべきである。すなわち、本性が真であるということは、無でなく存在することであり、それが存在するとは、精神の外部に実在することではなく、様々な特性を導出してひと繋りの系列を形成することができるという統一性を有していることそのものなのだ。デカルトは規定しているのだ、と。2/以上の理解が正しいとすれば、本性の真理と存在は、特性を導出する論証という操作の可能性に全面的に支えられていることになる。論証という過程の内実とは、より詳しくは次のようなものである。論証は「三角形について *de triangulo*」「特性を」論証するという二項関係を前提し、前者に後者が帰属するという関係を私が「望もうと望むまいと *velim nolim*」認めるということにおいて成立する。この「望もうと望むまい」という不随意性の表現は、「第四省察」の判断論の結論をここでの議論に導入するものである。「第四省察」では、知性の明証性によって促されて意志が同意を与

える(=判断の成立)ときには過誤が原理的に生じ得ないということが結論されていたが、そのポイントは、決定されつつ意志がはたらくという様式を肯定し、そのような仕方では意志することが「正しく行う *recte agere*」ことだと認める点にあった。「第五省察」においては、三角形と任意の特性の間に、必ずこうした正しい意志の働きが介在していることが示されているのであり、それが論証という過程の内実には他ならない。3/「第四省察」と「第五省察」の間の根拠づけ関係が以上のようなものであることを踏まえると、この二箇所における存在と真理の概念の展開もまた明瞭になる。「第四省察」の議論では虚偽の原因は意志の不正な行使という一点に同定されたが、一方で真理については、それが存在するもの全てについて広く帰されるかのような語り方に留められていた。そこでは何ものか *aliquid* であるならば全て被造物であるゆえに真である、という推論が示されつつ、「意志 *voluntas*」という能力や、「知得 *perceptio*」という知性の作用がそれ自体で「真である」と言われてもいた。こうした真理の担い手に関する無限定を示しながらも、ただ「正しく行う」ことを通して過誤を避ければ、それだけで直ちに真理に到達する、ということだけが断言されていた。これに対して「第五省察」の議論は、真理に達すると証明されている上の様式で実際に振る舞うことを通して、「真なるもの」の内実について積極的な把握を形成するものとして読める。すなわち、過誤を避けるための正しい行い方に従うことで、具体的なひとまとまりの「真なる本性」を対象として構成するという作業が、ここで明示的に行われているのである。

以上の解釈から、我々は次の解釈を展開する。

1/我々の認識対象となる事物が真に存在するという認定は、そのように認定するさいの意志的行為の正しさと不可分である。すなわち、ある本性を一個の本性として輪郭づけ、それに無でないリアリティを付与することができるのは、そうした事物について随意に変更することが不可能な論証の鎖を形成することができるからであり、それが「真なる本性」であるのは、そのような不随意性の中で意志を働かせつつなされる判断の仕方それ自体が正しいものとして肯定されているからである。従って、我々の生きる世界に何が存在するのか、言い換えれば、いかなる種類の存在者が実在可能なのかという問いは、我々がどう振る舞うべきなのか、という問いと表裏一体である。2/デカルトが神の存在を証明することによって獲得したものが正確に言って何であるのか。周知の通りデカルトは、神を認識しない無神論者は懐疑を解消することができず確実な知識を持つことができないと考えた。その理由は、無神論者が所有するのは、精神がその本性的構造からして同意を与えざるを得ないという状態としての「説得 *persuasio*」にすぎないという点にある。それでは説得以上の何を、神を知る者はもつのか。それは説得と何かしら精神の外部に存する対応物(神的知性のうちなる範型や個物に内在する形相)との一致を確認しているということではない。得られるべきなのは、説得という同じ事態が、「正しい行い」として肯定されうることについての気づきである。こうした行いの肯定が先立っており、そこから、そのような行いによって到達されるがゆえに、ある本性が真で存在するものとして成立する、こうした順序なのである。